

意思決定過程における追求姿勢と幸福感の関連

弓 削 久 子

1. 問題と目的

Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubomirsky, White, and Lehman (2002) はあらゆる選択肢の情報を手に入れ最良の選択肢を追い求めた上で意思決定を行うタイプを「追求者」と定義、後悔・追求者尺度を開発している。調査の結果、追求傾向にある人は後悔が生じやすく幸福感も低いことが示された。Schwartz et al. (2002) が開発した尺度を元に磯辺・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村 (2008) は日本の生活様式に合致する質問項目に修正を行い、日本版後悔・追求者尺度を新たに作成している。都築 (2008) によって調査が行われた結果、「追求」因子は「後悔」因子との間に有意な相関を示さず、自己肯定意識尺度 (平石, 1993) と有意な正の相関を示した。これらのことから日本版尺度には追求の肯定的側面を測る項目が含まれている可能性が考えられる。そのため本研究では日本版後悔・追求者尺度の因子構造の分析を行い測定内容を検討するとともに幸福感との関連も検討することを目的として調査を行った。

2. 方 法

調査協力者および調査方法

大学生および大学院生を対象に、質問紙を配布し回答を求めた。有効データは302名 (男性93名, 女性209名)、平均年齢は20歳 ($SD = 2.13$) であった。

質問紙の構成

日本版後悔・追求者尺度 (磯部ら, 2008)、FMS-18尺度 (森川・永野・福森・平井, 2014)、心理的well-being尺度 (西田, 2000)、自己肯定意識尺度 (短縮版, 対自己領域) (平石, 1993) により構成した。

3. 結果と考察

日本版後悔・追求者尺度の因子分析から「購入後悔」「過去後悔」「関心型追求」「躊躇型追求」が抽出された。「関心型追求」は因子間の相関から「過去後悔」において相関が見られず、FMS-18尺度の「注意」「受容」と正の相関が見られ、心理的well-being尺度、自己肯定意識尺度と正の相関が示された。このことから「関心型追求」は内的な基準を用いて自分にとっての最良を追い求めており、自己の存在や人生全般に対して肯定的で健康的な心理機能を持ち合わせることが示された。一方、「躊躇型追求」はFMS-18尺度の「受容」、心理的well-being尺度、自己肯定意識尺度と負の相関が示された。このことから「躊躇型追求」は他者比較を用いて最良を追い求める傾向にあり、幸福感や自己肯定感の低さと関連することが示された。

これらを通して日本版後悔・追求者尺度には異なる追求姿勢である「関心型追求」と「躊躇型追求」が含まれていることが明らかになった。そして心理的well-beingや自己肯定意識といった健康的な心理的機能は追求姿勢によって異なることが示された。